

未真名市素描

井田和樹

「友人」との対話

わたしがトラルファミアドール星人から学んだもっとも重要なことは、人が死ぬとき、その人は死んだように見えるにすぎない、ということである。過去では、その人はまだ生きているのだから、葬儀の場で泣くのは愚かしいことだ。あらゆる瞬間は、過去、現在、未来を問わず、常に存在してきたのだし、常に存在しつづけるのである。たとえばトラルファミアドール星人は、ちょうどわれわれがロッキー山脈をながめると同じように、あらゆる異なる瞬間を一望のうちにおさめることができる。彼らにとっては、あらゆる瞬間が不滅であり、彼らはそのひとつひとつを興味のおもむくままにとりだし、ながめることができるのである。一瞬一瞬は数珠のように画一的につながったもので、いったん過ぎ去った時間は二度ともどってこないという、われわれ地球人の現実認識は錯覚にすぎない。

トラルファミアドール星人は死体を見て、こう考えるだけである。死んだものは、この特定の瞬間には好ましからぬ状態にあるが、ほかの多くの瞬間には、良好な状態にあるのだ。いまでは、わたし自身、だれかが死んだという話を聞くと、ただ肩をすくめ、トラルファミアドール星人が死人についてという言葉をつぶやくだけである。彼らはこういう、"そういうものだ"。

——カート・ヴォネガット・ジュニア『スローターハウス5』

未真名、と書いてミマナと呼ぶ。相良龍一が生まれて育ち、そして今住んでいる市の名だ。元は『書紀』に登場した古の神々が住まう土地の名らしい。その由来を知った時、龍一はなんとなく不愉快になったことを覚えている。日本神話が不愉快ということではない。ファンタジーとして楽しむべき日本神話の地名を、現実の市につける行為自体がどうにも下品に思えたのだ。

もっともそれほど目くじらを立てる必要はないのかも知れない。命名した者の意図がどこにあるのかはともかく、現在の未真名市はあらゆる意味で理想とはほど遠い場所と成り果てたからだ。

うまい話があるんだ。

ある日ふらりと龍一の住居を訪ねてきた「友人」はそう言った。福建マフィアの地下銀行を襲おうぜ。上手くいったらお前にも分け前をやるよ。

彼に何を期待していたわけでもないが、こんな「うまい話」に乗ってくる奴がいたらお目にかかりたいものだ、と龍一は思った。学生時代にほんの半年同じ教室で学んだというだけで、数年の間全く音信不通、しかも外回りでへとへとになって帰ってきて少し仮眠でも取ろうと決めたところへ何の前触れもなくふらりと入ってきた自称「友人」に聞かされる話としてこれ以上胡散臭いものはない。

やばい話だってのはわかるよ、うん。

「友人」は龍一の顔色を察する様子もなく話し始めた。そうだよな、少しでもおつむの働く奴ならびびって当然だよな。でも俺だって考えたんだ——当たれば儲けはでかいし、何よりブツがブツだ。奴ら泣き寝入りするしかないんだぜ、まさか警察に駆け込むわけにもいかないんだからな。

間に合ってるよ、と一言言えばそれで済んでいたのかも知れない。だが龍一は口ごもってしまった。あの頃は龍一自身も、そして彼の周囲も尋常な状態ではなかったおかげで、級友たちへの連絡もろくにせず、高校を去ることになってしまった。それ以外にどうしようもなかったとは思いますが、少し気がとがめたのも事実だった。

もしかして、俺が連絡をよこさなかったの、怒ってるのかよ。

龍一の沈黙を誤解した「友人」の声がやや上ずった。俺だって心配してたんだよ、お前が高校を中退してからもずっと。でも俺の方でもいろいろあったし、ここにお前が住んでるってわかるまでにもいろいろあってさ…。

別にお前に心配してもらうほどのことじゃない。龍一は静かに言ったが、「友人」はその口調に龍一が激怒していると完全に誤解したらしい。

悪かった。俺が悪かった。「友人」の声はほとんど金切り声だった。お前がそんなに苦しんでいるなんて思わなかったんだ。許してくれ。

悪い奴じゃなかった。龍一はややうんざりしながら思い起こした。ただ少しばかり鈍感で、少しばかり要領が悪い奴だったというだけで。

しかし、俺が過去の記憶に苦しんでいるだって？

確かに愉快的思い出とは言えない。何かの拍子に、ふと、胸の奥で何かが蠢く気配はある——だがそれは今のところ、龍一が毎日起きて歩いて食べて飲んで排泄して寝る、何の邪魔にもなっていないし、第一、目の前で地べたに頭をこすりつけんばかりにしている自称「友人」にそれをどうにかできるとも思えない。どうにかしてもらおうとも思わない。

悪かった。でも、許してくれるよな。

そう言って顔を上げた「友人」の口元に浮かんだ媚びるような笑みは、とうの昔に盛りを過ぎた娼婦の笑みに似ていた。だから、ほら、うまい話を持ってきてやったじゃないか。

本来ならこんな話を聞けるような心境ではないのだ。つい先ほど、抗争寸前にまで高ぶっていた漢人とウィグル人の仲を取り持ってやったばかりで（本当に命がけだった。最悪の場合、双方から袋叩きにされかねなかったのだ）できることなら飯も食わずにそのままぶっ倒れて正体もなく眠りたいくらいだった。

しかしもう遅い。いくら胡散臭くともここまで聞いたからには話を聞かないかぎり帰ってくれないだろうし、追い返すタイミングはとうに逃している。自分の甘さを呪ったところで後の祭りだった。

そもそも地下銀行がどうのなんて話、どこで聞いたんだ。

龍一が食いついた、と思った「友人」の顔は輝かんばかりだった。ダチの姉貴が中国人の経営する店でホステスやっててな、と我が事のように得意げに言う。そこにマフィアどもの「会計係」がやってきて、酒飲むついでに自慢げに語ったんだと。

その姉ちゃんが逆にこっちの情報を漏らす、ってこともあるんじゃないのか。

疑うのかよ、と「友人」はさも不当な言いがかりだと言わんばかりに言った。そいつの親父もお袋も純血の日本人だぜ？ 中国人どもと俺たちとどちらに味方するのが得か、なんてわかりきってるだろうが。

お前は単なる人種差別主義者だよ、と指摘してやるのは簡単だが、そう言ったところで相手が怒り狂うだけで何の解決にもならないと思ったので他の実利的な質問をすることにした。

得物は。

拳銃が3挺あるぜ、安物のトカレフだけどな。サブマシンガンも2挺。あと、ネットから製造方法をダウンロードして作ったパイプ爆弾がある。車一台分ぐらいは木っ端微塵にできるぜ。大したもんだろ。

確かに大したものだが、それは襲う先がマフィアの地下銀行でなければの話だと思った。

人数は。

俺を入れて5人。分け前を考えれば充分だろ。あ、もちろんお前が加わる分にはどうってことないぜ。

軍隊経験者はいるのか。

痛いところを突かれたらしく、「友人」は口ごもった。いないよ。でも、射撃訓練は一通りこなしたんだぜ、自衛官上がりのインストラクターを呼んでさ。思いっきりふんだくられたけどな。

つまりは天下御免の烏合の衆というわけだ、そう思うと早くも続きを聞く気が失せてきた。そんな奴らを集めて何ができるというのか。路地裏に気の弱そうな奴を連れ込んで金を巻き上げるだの、路地裏に若い女性を連れ込んで手籠めにするだの、その手の下劣な犯罪の方がまだお似合いな連中に思えた。間違っても「マフィア」の「地下銀行」を襲うなどという芸当ができるとは思えない。

逃走ルートは決めてあるんだろうな。

車はもう用意してある。安全運転で目的地に横づけ、銃を構えて突入。「金はどこだ」。後は札束を詰めるだけ詰め込んで、一滴も血を流すことなく逃走。あとは近くの朝鮮系マフィアの縄張りに紛れ込みまえばいい。そうなれば奴らがどれだけ歯ぎしりしたって無駄さ。

じゃあ目的地へ向かう途中で誰かをひき逃げ、金庫はからっぽ、死体の山を築き上げて逃走、逃げる途中で渋滞に巻き込まれる可能性もあるんだな。

俺のダチにケチをつけるんじゃないよ、と「友人」の声が一オクターブ跳ね上がった。みんな憂国の士ぞろいなんだぜ、そんなドジ踏むもんかよ。

憂国の士？

「友人」はしまったと思ったらしいが、その言葉を引っ込める気はなさそうだった。ガイジンどもに牛耳られるこの国の将来を真に憂える人たちがいるのさ。この話にもいろいろと便宜を回してもらったし、多少のことならみ消してくれるって約束も取り付けた。もちろん、払うもん払うのが前提でな。

——もしかして、この話は「上納金」のためなのか？

わかってるじゃないか。

それで、なあ、お前の取り分は、その「上納金」を差っ引くといくらになるんだ。

意外な質問だったらしい。「友人」はいぶかしげな顔をした。

お前の取り分はちゃんと用意するって言っただろ。友達なんだからな。

俺の、じゃない。お前の、だ。

必要ねえよ。ただでだってやりたいくらいさ。俺は祖国解放のために戦う兵士のひとりになれば、それで十分なのさ。

こいつは学校へ行かなかった方がまだまともな人生を送れたんじゃないか、と龍一はしみじみ思った——もっともこの国の教育機関が友愛と協調の大切さを謳いながら、実際には弱者への侮蔑と共同体への盲信を教え込む場所ではない、と思い知った身としては今さら驚くこともなかったが。

だったらこの話はおしまいだ。俺は乗れない。

何でだよ。「友人」の声は今度こそ本当の金切り声になった。これはガイジンどもから祖国を解放するための前哨戦なんだぜ。中国人から、朝鮮人から、ロシア人から、黒人とユダヤ人とアラブ人から、イエメン人とウィグル人とチェチェン人から（このあたりで彼が知っている民族名を並べているだけとわかったが、龍一は黙っていた）。統一朝鮮だって、いつ海を越えて攻めてくるかわからないんだ（中国との小競り合いと旧北朝鮮ゲリラの鎮圧で手一杯のあの国にそんな余裕あるかよ、と突っ込みたくなかったが、やはり龍一は黙っていた）。お前にだって金は入るんだ。何が不満なんだ？

お前は誰かのためには金を稼げて、自分のためには稼げないのか。

「友人」がぐっと詰まった隙に、龍一はとどめを刺した。

聞かなかったことにしてやるから、今日はこのまま帰れ。そのダチどもと一緒に、手持ちの金全部使って、うまいものでもたらふく食って、余った金でおねえちゃんのおっぱいでも揉め。それからバカ話しながらへべれけになるまで飲んで、一晩寝て忘れろ。

それくらいで俺たちが忘れろと思うのかよ。

お前の言う「この国の将来を真に憂える人たち」だって、おっぱい揉んでる方がきっと楽しいさ。

——もし龍一が明日も知れないほど食い詰めていたら、「友人」の話に一も二もなく飛びついたかも知れない。よくぞ俺を選んでくれた、と感謝したかも知れない。だが幸運にも、本当に幸運にも、今の龍一はそこまで切羽詰ってはいなかった。悠々自適とは言いがたい、薄汚れた自慢のできない仕事だが、食うに困らないぐらいの収入はある。この「友人」の数倍は頼りになりそうな知人もいる。たまにはあるが、父親も訪ねてくる。さほど親しくもなかった「友人」の、とても成功するとは思えない、成功したところで何か意味があるとも思えない話に乗って、その全てを台無しにするのか。

考えるまでもない。

龍一は急に徒労感を覚えた。やはり間に合ってるよ、と一言言えばよかったと思った。そうすればこの「友人」に、好きではなかったが嫌いでもなかった男に、ここまで冷酷な評価を下す必要もなかったのだ。

これ以上説明する必要はないよ。俺は乗らない。

見損なっただけ、そう呟く「友人」の声はひずんでいた。もう少しは利口な奴だと思っていたのにな。

龍一は「友人」を見つめた。正確にはその身につけている物——馬鹿みたいに安値で売られる代わり、たやすく破損するブルゾンやTシャツや脱色ジーンズ、ナイキの粗悪コピーらしきスニーカーを見つめた。おそらくはメイド・イン・チャイナのだ。

お前やお前の「お友達」よりは、福建マフィアの方が幾分かお利口だよ。大体、敵を舐めて勝てると思っている奴と手を組みたいとは思わないね。

「友人」は本当に、本当に心の底から悲しそうな顔をした——もしかするとその瞬間まで、龍一がこの話を断るとは欠片も思っていなかったのかも知れない。そう思うと胸の奥がうずかなくもなかったが、もちろん龍一に自分の言葉を引っ込める気はなかった。

売国奴。中国人の肩なんか持ちやがって。お前には愛国心がないのかよ。

生憎、燃えないゴミの日に出したよ。

「友人」は黙って肩を震わせていたが、やがて踵を返して言った。お前なんか友達じゃない。龍一は悲しくなった。「友人」の言葉にではない。そう言えば龍一が傷つくと思い込んでいる「友人」の浅ましさにだ。

後には龍一ひとりが残された。あまり人に見られたくない顔をしていたに違いない。

認めるよ——龍一は心の中で呟いた。確かに俺は、お前の友達じゃない。

食事の支度は、しばらく横になった後ですることにした。どのみち空腹で目が覚めるだろう。

その後のことは、全て付け足しに過ぎない。

結論から言えば、「友人」が熱い魂のいまいち信用のおけない仲間とともに意気揚々と車に乗り込んだ時、襲撃される側の福建マフィアは彼らの情報をほぼ完全に把握していた。情報を漏らしたのは、龍一の読み通り地下銀行の情報をもたらしした例の日本人ホステスだった。儲けは弟と折半だと皮算用していた彼女は、やがて弟が自分を除け者にして襲撃計画を進めていることに不満を抱き、弟がとても信用に値しない悪たれ小僧どもを計画に引き入れようとしていることに腹を立て、そして事が露見した時の自分の運命に思い至って震え上がった。怒り狂った福建マフィアに地の果てまで追いかけて八つ裂きにされることを考えれば、成功して六等分、七等分にされた端金が手に入ったところで、とても割に合わない。彼女が弟を売るまでに時間はそうかからなかった。つまり、この計画に自分たちの全てを賭けた時点で、彼らの命運はすでに尽きていたことになる。

地下銀行、という呼び名から想像していたイメージとは比較にならない小綺麗なビルにとまどいながら（地下と言っても地下にあるわけではない——つまり彼らはろくに下見もしていなかったことになる）「友人」とその仲間は天井に向けて銃を乱射しながら突入した。歯並びの綺麗な受付嬢と、たまたまその場に居合わせた不幸なビジネスマンと、掃除をしていたパートの中年女性を死ぬほど脅えさせはしたものの、彼らの戦果はそれだけだった。

定年間近の支店長をさんざん脅しつけ、文字通り尻を蹴上げて大金庫のドアを開けさせたが、もちろん大金庫の中は空だった。

金はどこだ、とわめいている間に事態はさらに悪化した。ビル内にサイレンが大音量で鳴り響き、大金庫に通ずる通路全てが封鎖された。支店長を人質に取ればあるいは破滅の到来を少しは遅らせられたかも知れないが、彼はセキュリティを作動させると同時に姿を消していた。伊達に地下銀行の支店長をやってはいなかったらしい。

慌てふためく彼らの前に現れたのは、日本の警察ではなく、ビルと契約しているロシア系警備会社から派遣された重武装の保安要員たちだった。もう幾度目か 誰もが忘れてしまったロシア・チェチェン間の紛争を経験し、より高給を求めて軍を退役した特殊部隊出身者たちで構成され、ユーロ製の軍事ハードウェアに身を包み、カービン銃と散弾銃で武装し、しかもExtra Territoriality——日本政府からの「企業私有地における免責特権」というお墨付きまで持っていた。要するに「お宅の敷地で悪さをする奴らは我が国の国民どころか人間ですらありません。煮るなと焼くなと好きにしてください」というものだ。そして彼らには雇用主のビルに土足で踏み込んできた不埒なガキどもに遠慮する必要など一切、なかった。

4度連続して強烈な音と閃光を放つ大型閃光手榴弾の炸裂で、全員が視覚と聴覚を奪われた。反撃どころか、身をかばう余裕さえ与えられなかった。続く斉射で彼らははずたずたに引き裂かれ、薙ぎ倒された。かろうじて息のあった者にも、ロシア人たちは拳銃で丹念にとどめを刺して回った。

日本人の清掃スタッフにより、死体は布袋に詰められ、床は血の跡すら残さず清められ、いずこへともなく運び去られた。事件に巻き込まれた人々は近くの病院へ移送され、ショックが大きかった人々のカウンセラー料は市が負担した。

事件の顛末を、龍一はタイ人の情報屋から聞いた。同じ日本人の君に言うのもなんだけどね、お粗末な事件だったよ。

俺に遠慮する必要はないぜ、と龍一は答えた。確かに、お粗末ではあったよ。

通話を切ってから、龍一は傍らの文庫を手にとった。ちょうど夕食を終えて、カート・ヴォネガット・ジュニアの『スローターハウス5』を読んでいたところだった。

2、3ページほどめくったが、不意に嫌になって、そのまま放り出した。

わたしがトラルファマドール星人から学んだもっとも重要なことは、人が死ぬとき、その人は死んだように見えるにすぎない、ということである。過去では、その人はまだ生きているのだから、葬儀の場で泣くのは愚かしいことだ。あらゆる瞬間は、過去、現在、未来を問わず、常に存在してきたのだし、常に存在しつづけるのである。たとえばトラルファマドール星人は、ちょうどわれわれがロッキー山脈をながめると同じように、あらゆる異なる瞬間を一望のうちにおさめることができる。彼らにとっては、あらゆる瞬間が不滅であり、彼らはそのひとつひとつに興味のおもむくままにとりだし、ながめることができるのである。一瞬一瞬は数珠のように画一的につながったもので、いったん過ぎ去った時間は二度ともどってこないという、われわれ地球人の現実認識は錯覚にすぎない。

トラルファマドール星人は死体を見て、こう考えるだけである。死んだものは、この特定の瞬間には好ましからぬ状態にあるが、ほかの多くの瞬間には、良好な状

態にあるのだ。いまでは、わたし自身、だれかが死んだという話を聞くと、ただ肩をすくめ、トラルファマドール星人が死人についてという言葉をつぶやくだけである。彼らはこういう、"そういうものだ"。

——カート・ヴォネガット・ジュニア『スローターハウス5』

行きずりの暴力

初夏らしい、やや冷えた朝だった。

早目に出発したため、街は目を覚ます直前だった。毒々しいネオンサインが灯を落とされ、入れ替わりに朝もやの中で電動シャッターがきしみながら上がりだす。酒場や大衆食堂店の従業員たちが、ホースからの放水で道端の反吐を洗い流している。近くの建物で換気扇が回り始め、豆板醤の匂いが相良龍一の鼻孔を刺激した。午後からの「仕事」の前にここらへんで腹ごしらえをしておくのも悪くない、と思いつく。

仕事場の方に顔を出したところ、ちょうど居合わせた林に「行きつけの電子パーツ店に新しい部品が入荷したからそれを受け取ってきてほしい、先方に話はつけてあるから」と唐突に頼まれてしまった。そんなものネット通販で充分だろ、と言うと「わかってないねえ」という目をされた上に、正規の店じゃ扱ってない特注品だし、配達サービスっていまいち信用できないし、僕とっても忙しいし、それにいま自由に動けるのって君だけだろ、と一息にまくしたてられた——おまけにその『3次元フォトリソ結晶チップ』とやらがどれほどすごい代物なのか10分ばかり熱弁を振るわれ、門外漢の龍一を大いに腐らせた。量子通信の新しい可能性が開けたからといって、それが彼の食いぶちにどう関係するのだろうか？

龍一は手にした紙袋をしげしげと見つめ直す。林に教えられた住所に行ってみると、そこは店どころかただのプレハブ小屋で、おそろおそろノックしてみると白髪三千丈を絵に描いたような老人がゆらゆらと顔を出し、何も言わずに龍一の手紙袋を握らせ、呆気にとられている彼を尻目にふらふらと小屋の中へ戻っていった。しかもそれが入っているのは——餃子だかシューマイだかを入れる紙袋だった。新手のネット詐欺に加担した気分になる。

まあいい、と思い直した。ブツは無事受け取ったのだから、後は持って帰って林に渡すだけだ。こいつがたとえまがい物でも、地団駄を踏むのは林であって俺じゃない。

それにしてもこのまままっすぐ帰るのも芸がないので（林は喜ぶだろうが、ただ喜ばせるのも癪な気がしてきた）、買い物を兼ねて少し散策してみることにした。道端のタクシー乗り場にはこれから帰宅する娼婦や男娼たちが早くも行列を作り始めている。深夜限定であるはずのところどころ化粧の剥げた彼ら彼女らの顔は陽光の下で見ると実年齢より十も老けて見えた。

蜂の羽音にも似たモーター音が頭上から聞こえてきた。見上げると、手の届きそうな低空をイトマキエイそっくりの小型軽飛行機が通り過ぎていくところだった。艶めかしく小刻みに蠢いて姿勢制御を行う機体一体型の翼と、単眼のような複合センサードームが奇妙に生物的な印象を与える。地上からでも、やはりエイを連想させる生白い腹に黒の極太明朝体で記された『未真名市警』の文字がはっきりと見えた。地上から石か陶器の破片のようなものが投げられるのが見えたが、それは機体に届く遙か手前で勢いを失ってあらぬ方向に落ち、数秒後に何かが割れる音と怒鳴り声が聞こえてきた。恐らく投げた本人も、届かせようとは思っていなかったのだろう。

老沙三丁目の交差点を曲がった途端、龍一は胸の中で「おやおや」と呟いた。日本の道路事情には不釣り合いな車体の長い高級外車が、路面の汚水を撥ね飛ばし、通行人を追い散らしながら、通りに面した中華料理店の前でゆっくりと停まるところだった。

高そうだが柄の悪いスーツを着た人相の悪い男たちが次々降りてきた。周りにはこれまた人相の悪い男たちが四方に配置されていて、懐に得物を「呑んでいる」様子を隠しもしていない。要するに大事な「会合」の始まる場所に出くわしたわけか。

注意深く観察しすぎたらしい。人相の悪い男たちの一人が龍一の方を胡乱な目つきで見返してきたのに気づいて、龍一はさっさとその場を離れることにした。自分からトラブルに近づいていく必要はないし、何より見ていて心温まる光景でもない。

踵を返した瞬間、背後で強烈な閃光が弾け、一瞬遅れて熱と大音響が龍一の背を激しく叩いた。ハンマーで背中を思い切り殴られたような衝撃に呼吸が停まる。逆らわず、迷わず、地面に身を投げ出した。路面との摩擦で肘の皮が剥ける痛み。伏せた彼の頭上を、粉塵と爆風が吹き抜けていった。

ぼうん、と柔らかくて質量のあるものが龍一の目の前に落ちて二、三回バウンドした。あの高級外車のタイヤだった。

痛む全身をねじって後方を見る。顔が映るほど黒光りしていた車体は、今や炎と煙を上げる鉄塊と化していた。ロケット砲か、あるいは擲弾銃などの重火器による攻撃と一目でわかった。車の四方を固めていた男たちが轢き殺された蛙のように路面に横たわって四肢を弛緩させていた。龍一の足元から数メートルと離れていない場所に倒れている男の頭部は爆ぜて生白い内容物をはみ出させ、その向こうに倒れている男の背には炎がとりついてちろちろと燃えている。もちろん、ぴくりとも動かない。遠くで鳴っているサイレンがドップラー効果のせいで妙に割れて聞こえ、別の世界のものののように現実感がない。

奇妙なほど歩調のそろった足音とともに車の周囲をいびつなシルエットの人影が取り囲んだ。全員が防弾ヘルメットに黒の目出し帽をかぶり、都市迷彩戦闘服の上からボディーマーとタクティカルベストを重ね着して様々な個人戦闘装備を装着しているので体格はおろか、性別すら判然としない。彼らが構えている白灰二色の汚れ塗装を施された近接戦闘用カービン銃と軍用散弾銃より、全身から放たれる冷え冷えとした気配の方がよほど剣呑だった。

数名がかりで恰幅の良い男が車内から引きずり出された。皮膚を大小の破片で切り裂かれた顔の中で、眼窩の奥に引っ込んだ目を小刻みに動かし、感電したように手足を弱々しく痙攣させている男からは、あらゆる見栄や矜持が剥ぎ取られていた。泳ぐ眼差しが一瞬、龍一の目と合った。何かを言おうと唇が動いたのがはっきりと見て取れた。

指揮官らしき目出し帽の兵士が一步進み出、大腿部に装着したホルスターから拳銃を引き抜き、男の頭部に一発、二発撃ち込んだ。熟練の屠殺人を思わせる手際の良さだった。殺害確認のためだろう、銃口に装着されたアタッチメントで男の死に顔を撮影していた指揮官の目が、ふと龍一を捉えた。

一秒が何万倍にも引き延ばされたような感覚。体内の血流すら粘液に変わったような錯覚。

たった今、確実に彼は龍一を「どうするか」算段したはずだった——しかし結局、それ以上の反応を示さずに拳銃をしまうと、静かに片手を上げた。

最後まで一言も発さず、兵士たちは路地裏へ吸い込まれるように消えていった。あれだけの重装備を身にまといながら、それらが微かに触れ合う音しか残さなかったことが、かえって彼らの技量を物語っていた。

まるでそれを待っていたかのように、今まで静まり返っていた通りに喧騒が戻ってきた。

聞き覚えのあるモーター音に頭上を見上げると、あの小型軽飛行機が悠然と空を横切っていくところだった。地上の騒ぎなどどこ吹く風、といった呑気な飛び方に、龍一はつい舌打ちした。犯罪発生率の低下に何の関係もなかったら、あんなものを飛ばしておく理由がどこにある？

「……使えねえビッグブラザーだ……」

ふと思いついて、傍らの地面を見る。

——焼け焦げた上に真っ平らに潰れた紙袋を見ながら、龍一はどう林に言い訳したものか考え始めた。

「……なるほどな。さっきから膨れてんのはそのせいかな」

駆動系とエンジン、それに車内無線を強化したヒュンダイのハンドルを握りながら、望月崇は心底愉快そうに笑った。短く刈った頭髪、こざっぱりとした麻のスーツ、綺麗に磨いた革靴、そして陽気であけっぴろげな笑い。どれも人を泥沼に蹴落として生業にする男のものには見えなかった。「そりゃゲンの悪いこったな。まあ、そういうこともあるさ。厄介事の一番単純で確実な解決方法は、相手を裏庭へ引きずり出して頭をぶち抜くことだからな。それで飯食ってる奴なんざ、この街だけでも何人いるかわかりゃしない」

龍一は口元を曲げたまま答えなかった。この男に笑われたのが気に入らなかったし、笑われても仕方ないと自分で思っていることも気に入らなかった。苦痛と吐瀉物にまみれた仕事で食っている男が自分を上回る暴力を目の当たりにしてひたすら縮み上がっていたなど、他人の話だったら彼自身も笑っていたはずだ。

結果として、午前中の出来事は龍一の財布にも打撃を与えた。事情を聞いた林は「友達価格に負けておくよ」と笑顔で言い放ったのである。龍一に直接の責任はないとは言え、弁償することに異論はなかったのだが、それでも提示された金額を見て目を剥きそうになった（しばらくはカップ麺で三度の食事を済ませるのか、と龍一は暗澹たる気分になった）。決済を終えてもう一度あの小屋へ行ってみると、同じ老人がふらふらと出てきて、やはり無言で龍一の手紙袋を握らせてゆらゆらと戻っていった。何だか、自分まで詐欺に引っかかった気分になった。

そういう事情で「仕事」に専念するには龍一の心情はあまり穏やかな気分ではなかった（朝飯を食べ損ねたのも大きな理由だ）。とは言え、被雇用者の心情など一顧だにせず発生するのもまた「仕事」だった——何しろ、引き受けなければ否応なしに当分三食カップ麺だ。

「そう言えば、あんたらはあれのことをどう思ってるんだ？」

「あれ？」崇は怪訝な顔になったが、龍一が人差し指を上に向けると、ああ、と頷いた。

「あんなもん、みんな鼻で笑ってらあ」そういう自分も鼻で笑いつつ崇は言った。「見られたくないことは見られないところでやればいいだけの話だからな」

言われてみれば道理だ。

「しかし、その兵隊どもはどこの誰ちゃんだろうな。あそこは福建マフィアのシマだったはずだが」

「さあな……俺にわかるのは連中が日本人じゃなかったことと、装備も錬度も只者じゃなかった、ってことぐらいだ」龍一は目出し帽の兵士が向けてきた、揺らぎもしない灰色の瞳を思い出していた。「絶対にけちな兵隊崩れなんかじゃないね。ばりばりの現役だ」

「となるとますますわからないな。外国人だからってマフィアの仕業とは限らんし……なんせ暴力もアウトソーシングの時代だ」

何となく癩に障る表現だな、と龍一は思った。重火器で吹っ飛ばした車の中から、まだ生きている人間を引きずり出して頭をぶち抜くのが「アウトソーシング」とはよくも言ったものだ。特定の誰かに対してではないが、くたばれ、という気分になる。

それにしても、と思う。確かにあの界限は少しばかり柄の悪いところではあるが、歩いていただけでいきなり身ぐるみはがれるというほどひどくはない。ここは 法治国家ニッポンであって、ベルファストやモガディシオやファルージャではない。いつからプロの兵隊を雇って白昼の通りで公開処刑、などという蛮行がまかり通るようになったのだろう。

「さ、着いたぜ」車を止めると、崇はやたらと気安い調子で龍一の二の腕を軽く叩いた。「嫌でも身が引き締まるね……俺とお前、それに高塔のお姫様の利害が一致するなんて、滅多にないこったからな」

「……別にあの人も、あんたを元気づけるためにやっているわけじゃないだろう」

自分でも口調が慫然としているのがわかった。この男と組むのも、この男の口から「彼女」のことが語られるのも、何一つ気に入らなかった。馬鹿と組むよりは崇と組んだ方がはるかに利口だ——わかっていても、龍一は目の前の男の、できれば知らずに済ませたい部分を目の当たりにしすぎていた。

「なあ龍一。お前、暴力は好きか？」

「何だよ、いきなり」

「どうした、聞かれて困るような質問か？ 好きか嫌いかでいいんだよ」

「困るね。好きでも嫌いでもない。少なくとも俺は、親父とお袋に『人を殴ってはいけません』と言われて育ったぜ」

「俺もそうなんだ」それが聞きたかった、と言わんばかりに崇は嬉しそうに笑った。「だからこういう奴を見ていると、自制が効かなくなってしまうよ。こんなふうにしな」

言うが早い、這いつくばったままスタンガンに手を伸ばそうとしていた男の顔面を、遠慮なしに革靴で蹴飛ばした。軟骨が潰れる胸の悪くなる音が響き、鼻血が飛び散る。壁際でひと塊になって震えていた少年たちが「ひい」と奇妙な悲鳴を上げた。「暴力はやめてください！」という甲高い声に、龍一はうんざりした。

ビルの谷間の薄暗い路地、見えるのは点在する汚水溜まりと室外機だけ、という気の滅入る眺めが、顔面を血に染めて倒れている男たちのおかげでさらに凄惨なものになっていた。原因はもちろん龍一たちだ。爽快感のかけらもない光景だった。

「よく言うぜ……じゃ、これは何だ？ 彼女へのプレゼントか？」崇は失笑しながら、彼らの持っていた軍の放出品らしい布バッグを逆さにして振った。警棒や催涙スプレーやシースナイフが路上に落ちて耳障りな音を立てる。

その中に混じっていた、黄色い油紙に包まれた粘土状の塊が龍一の目を引いた。大きさは弁当箱ぐらい。手に持つと、感触もやはり粘土そっくりだった。ただし、普通の粘土よりやや重く、密度が高いように思える。

「ほう、これはこれは……」

崇が目を細めたところを見ると、ろくなものではない、という見当はついた。

「セムテックス……プラスチック爆弾だよ。米軍のコンポジションC4より入手は簡単だが、れっきとした軍用だ」

「へえ……」今度は龍一が目を細める番だった。「まさか、これも彼女へのプレゼントか？」

「というわけで質問タイムだ」崇は農奴を睥睨する皇帝のような態度で少年たちを見回した。「これは誰からもらった？ 何に使うつもりだった？ 一番先に歌った奴から無罪放免だ」

奇妙な沈黙が路地裏を支配した。少年たちが目配せと肘のつつき合いを交わす中、倒れていた男が意外なほどの素早さで起き上がり、駆け出した。中学生の時に国語の授業で習った「脱兎のごとく」という表現が実によくわかる逃げ方だった。

崇が面倒臭そうに言った。「龍一、逃がすな。方法は任せる」

あの勢いで走る相手と追いかけてこするのは確かに御免だったので、龍一は手に持っていた塊を振りかぶり、投げた。

セムテックスの塊が走っていた男の背に命中した瞬間、小麦粉の袋を棒で力一杯叩いたような音がした。男は「ぐえふ」と奇妙な音を吐き出してのけぞり、拳銃で撃ち抜かれたようにその場に倒れた。口から噴き出た吐瀉物が綺麗な放物線を描くのが見えた。

「ストライク、バッターアウト」崇が楽しげに言った。「いい腕だ。どうせなら頭に投げつけてやりゃよかったのに」

「頭はまずいだろ。人間がどれだけ壊れやすいか、あんたならよく知ってるはずだがな」

言うと、崇が奇妙なほどの真顔を向けてきたので龍一は驚いた。

「何だよ？」

「その調子だ」

虚を突かれて龍一は黙り込んだ。反対に、崇は笑い崩れた。

「とにかく、よくやった。そいつに泥を吐かせるのは俺に任せる。お前はそっちのガキどもを頼む」

頼まれてもな、と慥然としながら龍一が少年たちの方に近づいていくと、彼らは哀れを催すほど動揺した。

「な、何なんすかあんたたち。警官でもないくせに、こんなことする権利がどこに……」

「がたがた抜かすな。こっちも腹が減って人間が狭くなってるんだよ。痛い目に遭いたくなかったら、知ってることを全部吐いちまえ」

少年たちはがくがくと震えながら、全身で同意した。

崇が笑った。「何だ、お前、やればできる子じゃないか」

「……じゃ、さっきの質問の繰り返し行くぞ」照れ隠しに手を振りながら龍一は言った。「お前らはどういう集まりなんだ。こんな物騒な道具をどうやってそろえた」

「どういう集まりって……ただ、なんとなくつるんでるだけで」少年たちの一人がおずおずと話し始めた。「趣味も似通ってたし……ラジコンとか、ゲームとか」

「結構なことじゃないか。そのまま趣味を突き詰めろよ。なんでこんなもんを持ち出す必要がある？」

実際、彼らの身なりは汚らしくもなければ垢抜けてもいない感じで、つまり暴力的な手合いには見えない。

「そっちの人たちに言われたんです。もっと面白い遊びをやってみないか、ついでに朝鮮人や中国人に一泡吹かせてやったら愉快だろう、って」

「一泡吹かす？」

「僕らの持っているラジコンにこいつをくくりつけて、奴らの店に突っ込ませる。面白いぞ、って」

「……面白いぞ、で済む話かよ」龍一は天を仰ぎたくなった。

「断れなかったのか？」

「断れなかったんです。持ち合わせがない時にお金を貸してくれたり、やばい奴らが因縁をつけてきた時に追っ払ってくれたり……それで、断りにくくなって……」

「そのままずるずると、か」

崇がいる方角からかすれた悲鳴と「ほれ、早く吐かねえと両手の爪が全部割れちまうぞ」という楽しげな声が聞こえてくるので、龍一はあまりそちらを見ないようにした。

別の一人が我慢できなくなったように口をはさんだ。「俺たちだって嫌でしたよ。中国人の友達だっているし、マフィアは怖いし……でも、もう実家の住所も知られてるから……」

「じゃ、他の得物は何だよ？ 爆弾まで持ってるのにまだ足りないってか？」

「え、それは……怖かったから、護身用に」

お前らが一番物騒なんだよ、と思ったが黙っていた。どのみち、説教できる身分ではない。

崇が立ち上がった。「行くぞ。こいつは使いっ走りだ。大したことは知らねえ」

「それだけ聞き出すのに、ずいぶん時間がかかっていたみたいだが？」

「焦るなよ。素性はわかった。こいつ、『ミマナ・ガーディアンズ』の元メンバーだ」

「……聞き覚えがあるな」数年前に日本人商店主の子息らによって結成されたが、外国人労働者への集団リンチや違法火器の所持、女性隊員への性的暴行事件などが発覚して主要メンバーが検挙され、解散に追い込まれた自警組織の名だ。

「組織は壊滅してもつながりまでは消えてなかった、ってことだろうな。こいつの知り合いを当たれば、後は売った奴も芋づる式にたぐれる。行くぞ」崇は這いつくばって呻いている男の背を思いきり踏みつけて、さっさと車の方へ歩き出した。

「こいつはどうするんだ？」

「ほっとけ。裁判は俺たちの仕事じゃない」

別に留まる理由もないので龍一も後に続こうとすると、おずおずと声をかけられた。

「あの、僕たちこれからどうなるんすか……」

「どうなるもこうなるも、家に帰ってさっさと忘れろ。言っておくが、いくら警察がぼんくらでも爆発物を使ったら奴らも本気になるし、マフィアだって俺たちほど優しくないぜ。じゃ、次から友達は選べよ」

崇の後について歩きながら、龍一はふと、聞き慣れたモーター音に頭上を振り仰いだ。ちょうどイトマキエイそっくりの小型機がビルで細長く切り取られた青空を横切っていくところだった。疑問が湧く。——もしかしてこの男、あれの巡回ルートと通過時間を勘定していたのか？

「……なるほどな。だいぶわかってきたぜ」崇は何が楽しいのか、あの男たちを叩きのめして奪った電子ペーパーをいじくりながら嬉しそうに笑ったが、龍一は口一杯に頬張ったブリトーを麦茶で流し込むのに大変忙しかったので視線だけ向けた。「奴らのターゲットだよ。雑貨屋、喫茶店、ブティック、クリーニング店。店はいろいろだが、日本人経営の店は一軒もねえ」

龍一は口の中のブリトーを飲み込んだ。「……やっぱり、MGの残党か」

「趣味のいいもんじゃねえな、ニキビ面の餓鬼どもに物騒なオモチャを渡してガイジンを襲わせるなんてのは」

「商売敵が減るんなら、結果的にはあんたらのプラスになるんじゃないのか？」

崇はさも不当なことを言われたかのように目を剥いた。「冗談じゃねえ。商売敵を残らず叩き出すなんて、自分の足を食ってるようなもんだ。藤枝組の若頭だって、ガイジンは見つけ次第殺せ、なんて言いやしねえ」

「やり口は素人でも、使っている道具は本格的か」

「当分は俺もお前も、仕事に困ることはなさそうだ」

だが龍一が考えていたのは別のことだった。——あの兵隊たちが、高塔百合子に雇われていたとしたらどうだろう？

証拠は、ない。ただの勘だ。だが龍一は身体が芯から冷えてくるような感覚を味わっていた。彼女は俺や望月以外に、いったい幾つの暴力装置を保有しているのだろうか？ それらを使って、何をするつもりなのだろう？

「さ、お前の腹ごしらえも終わったし、そろそろ出発するか。日が落ちる前にもう二、三人シメる必要があるからな」

「元気だな。あんたは食わなくていいのか？ それとも仙人みたく、霞でも食うつもりか？」

もちろん嫌味だが、鼻で笑われただけだった。「俺はお前と違ってお育ちが悪くてな。テーブルとナプキンがなくても事足りるんだよ」

龍一は歯を剥いたが、崇は素知らぬ顔のままアクセルを踏んだ。

タイヤが路面を噛むのとほとんど同時だった。低く重く、腹の底に響く轟音が大気を震わせた

。

振り返った龍一は愕然とした。繁華街の方角、波立二丁目の辺りから、一筋の黒煙が上がっていた。

崇は笑った。「正午の時報だな」

未真名市素描

<http://p.booklog.jp/book/27747>

著者：井田和樹

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shadowontheida/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27747>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27747>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.